

●プロジェクト報告

没後50年記念 グレインジャー音楽祭  
2011——国際シンポジウムとコンサート  
(青山学院大学・2011年11月27日)

目次

実行委員長より 宮澤淳一

基調講演と国際シンポジウムの3つの報告論文：

「パーシー・グレインジャーという人(基調講演)」ペネロピ・スウェイツ(木下 淳 訳)

「民謡収集の芸術と科学へのグレインジャーの貢献」チャロン・L・ラグズティル(宮澤淳一 訳)

「パーシー・グレインジャーとアフリカ系アメリカ人、アメリカ・インディアンの音楽  
——ナタリー・カーティス・バーリンとの関係を中心に」柿沼敏江

「私なりのオーストラリア的視点で見る——パーシー・グレインジャーとメルボルン大学  
グレインジャー博物館」アストリッド・ブリット・クラウトシュナイダー(宮澤淳一 訳)

キーワード

パーシー・グレインジャー (Percy Grainger, 1882-1961); 天才 (genius); 民謡収集  
(folk song collecting); ワールド・ミュージック (world music); グレインジャー博  
物館 (Grainger Museum); メルボルン大学 (University of Melbourne); オーストラ  
リアン・アイデンティティ (Australian identity); 豪日交流基金 (Australia-Japan  
Foundation); 日本音楽学会 (The Musicological Society of Japan)

Proceedings from Percy Grainger Music Festival 2011: International Symposium and  
Concerts, Aoyama Gakuin University, Tokyo, November 27, 2011

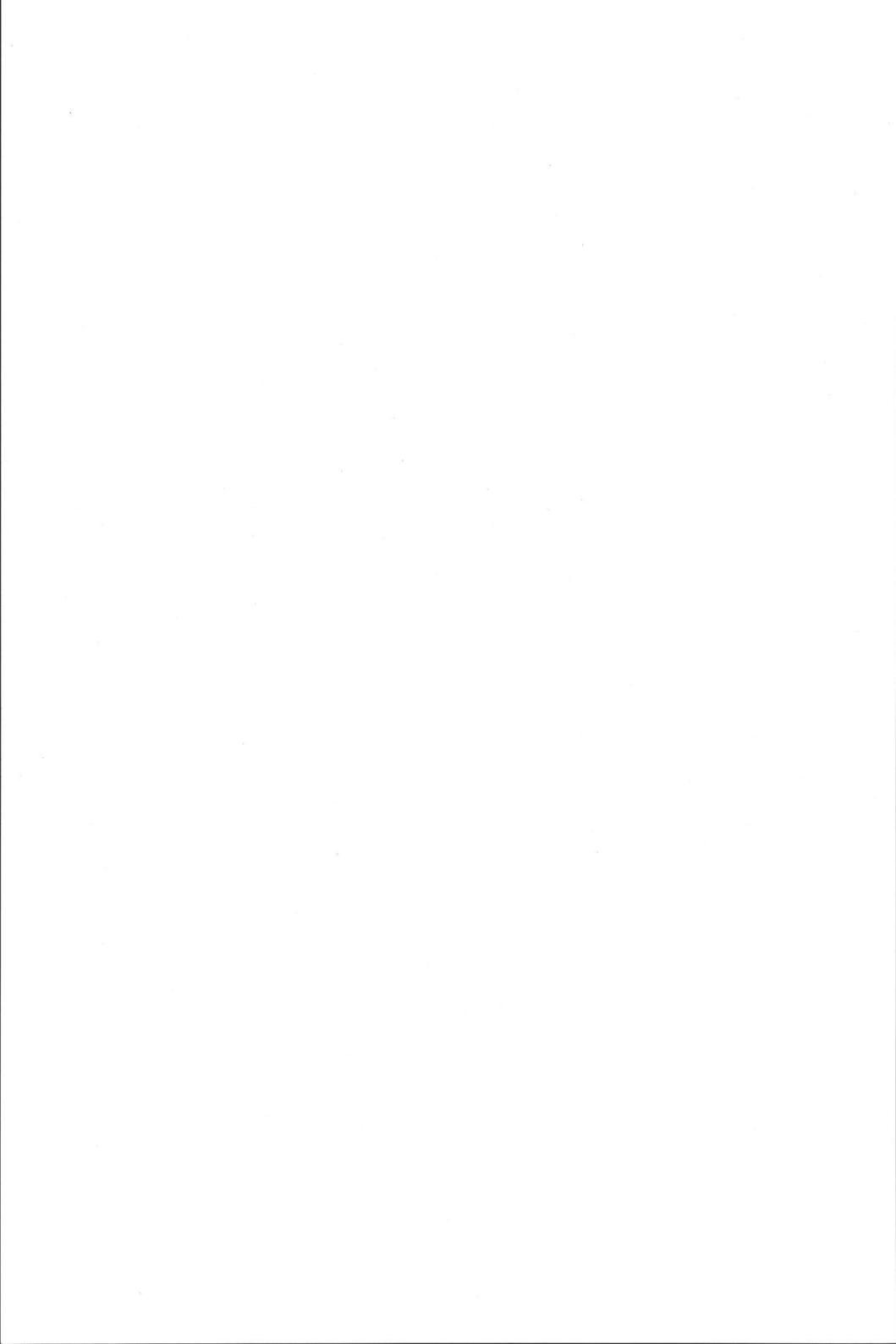
“Words from the Chair” by JUNICHI MIYAZAWA (Aoyama Gakuin University)

“Percy Grainger, the Man” by PENELOPE THWAITES (pianist/Grainger Scholar)

“Percy Grainger’s Contributions to the Art and Science of Collecting Folk Song”  
by CHALON L. RAGSDALE (University of Arkansas)

“Percy Grainger and African American / American Indian Music: Focusing on His  
Relationship with Natalie Curtis Burlin” by TOSHIE KAKINUMA (Kyoto City University of Arts)

“‘Seeing things in my Australian way’: Percy Grainger and the Grainger Museum at the  
University of Melbourne” by ASTRID BRITT KRAUTSCHNEIDER (Grainger Museum, University  
of Melbourne)



## 実行委員長より

宮澤 淳一

2011年11月27日(日)、青山学院大学青山キャンパス(青学講堂ほか)にて、「没後50年記念グレインジャー音楽祭2011」を開いた。主催は青山学院大学総合文化政策学部、共催はグレインジャー没後50年記念イベント実行委員会。フライヤーの文句を借りれば、「異色の音楽的ヒーロー、パーシー・グレインジャーの生涯と仕事を国際シンポジウム、各種コンサート、映画上映などで回顧する特別イベント」である。本誌では実行委員長の立場からこの催しの内容を総括し、総合文化政策学部における教育・研究上の観点から位置づけを再確認する。続けてプロシーディングズとして、基調講演と国際シンポジウムで報告された論文3本を再録・紹介する。

## 企画の始まり

1882年にオーストラリアに生まれたパーシー・グレインジャーが自宅のあった米国ニューヨーク州ホワイト・ブレインズで没したのは、1961年2月20日のことである。没後50年を迎えた2011年は世界各地でイベントが催されたが、いち早く彼の命日に合わせて2月17日から20日までロンドンで行なわれたのが、各種の演奏会とセミナーから構成された *Celebrating Grainger 2011* であった。日本ではちょうど私大の入試期間であり、私は参加できず残念に思っていたが、ならば日本でも何かやろう、と音楽仲間の木下 淳に促され、やはり仲間の増子明洋とともに2月上旬より企画立案を始めた。

グレインジャーは無名の作曲家ではない。1990年代後半より日本でもメジャー・レーベルよりCDが出始め、注目が集まったし<sup>1)</sup>、彼をフィーチャーする企画は日本で

- 1) 例えば、ジョン・エリオット・ガーディナー指揮モンテヴェルディ合唱団による『グレインジャー合唱曲集——ロンドンデリーの歌』(マーキュリー:フィリップス PHCP 335、1996年3月6日発売)、サイモン・ラトル指揮バーミンガム市交響楽団による『リンカーンシャーの花束——グレインジャー管弦楽作品集』(東芝EMI:EMI TOCE-9476、1997年6月18日発売)がある。また、1996年より、東京エムプラスが英国のシャンドス・レーベルの企画 *Grainger Edition* を直輸入盤の「国内盤仕様」で発売を開始した。1枚目は管弦楽作品集(東京エムプラス MCHAN 9493、1997年9月25日発売;原盤は Chandos Chan 9493, rel. 1996)で、その後発売が続いた(原盤は2004年発売の第19巻で途絶え、2011年にセットで再発売された。CHAN 10638(19))。当時の世界的な再評価の流れと日本での動きについては以下を参照。宮澤淳一「パーシー・グレインジャー再評価の気運をとらえて——彼の母国オーストラリアへの旅」、『音楽芸術』第53巻第12号(1995年12月):94-96頁。同前「パーシー・グレインジャー」、『レコード芸術』第45巻第10号(1996年10月):54-55頁。

も過去に何度かあった<sup>2)</sup>。また、少なくとも吹奏楽の分野では、グレインジャーの名はそれ以前より知られ、日本でも作品が紹介、実演されてきた（そこには若き日にグレインジャーの薫陶を受けた指揮者フレデリック・フェネル (1914-2004) の尽力も大きかったと考えられる)。しかし、21世紀を迎えてからの日本では、グレインジャーの作品の新録音も減り、一般の音楽ファンのあいだでは、その受容は低調なものとなっていた。その意味で、今回、没後50年を記念する企画を日本で行なった意義はそれなりにあったと自負している。

立案にあたっては、まず、英国のグレインジャー協会に連絡をし、企画協力を要請、加えてロンドンでの記念イベントの芸術監督をしたピアニストのベネロピ・スウェイツ<sup>3)</sup>にメインゲストとしての参加を求めたところ、ともに快諾を得た。そこで「グレインジャー没後50年記念イベント実行委員会」を前述の2名とともに発起し、最終的に以下の方々に実行委員になっていただいた（敬称略）——グレインジャーを含め現代音楽を幅広く研究する研究者の柿沼敏江（京都市立芸術大学）、フェネルのもとでグレインジャーの作品について薫陶を受けた指揮者の大澤健一（国立音楽大学）、超絶技巧の作品とデュオの演奏形態に通暁したピアニストの山口雅敏（神戸女子大学）、日本コロムビアで多くの名盤を手がけた音楽プロデューサーの川口義晴（青山学院大学——総合文化政策学部の「ラボ・アトリエ実習」として「音楽芸術を実践的視点で学ぶ」を担当）、本学部同僚の大島正嗣（青山学院大学——同実習で「メディアアタック・ラボ」を担当）。実施日も11月下旬の日曜日を見込み、基調講演、シンポジウム、映画上映、各種コンサートを1日でまとめる企画を組むこととした。

### まず取り組むべき課題

その上で、問題は、資金・スタッフ・会場の確保であった。今回の実行委員および関係者は、グレインジャーのイベントをすること自体に関心があるのであって、誰も

2) 例えば以下のもの。「パーシー・グレインジャーを知ってるかい？」東京コンサート・シンガーズ第21回定期演奏会第2部、今村能指揮（紀尾井ホール1999年9月26日）。「パーシー・グレインジャーの世界」（全3回）、出演：柴野さつきほか、企画：宮澤淳一、柴野さつき、尾島由郎（築地・兎小舎、2000年12月1日；2001年4月20日；11月29・30日）。「パーシー・グレインジャーの世界Ⅰ——歌曲と2台のピアノのための作品」出演：松永知子、重松聡、重松万里子ほか、企画構成：前田淳、ハートフェルト・コンサート（三鷹市芸術文化センター、2002年10月14日）。「よみがえるパーシー・グレインジャー物語——パシフィック・クロッシング2006」出演：レスリー・ハワードほか、音楽監督：藤枝守、企画監修：柿沼敏江（東京：自由学園、2006年11月22・24日；金沢：金沢21世紀美術館、11月25・25日）。

3) スウェイツには以下の編著もある。Penelope Thwaites, ed., *The New Percy Grainger Companion* (Woodbridge: Boydell Press, 2010).

利益は求めていない。そこでまず、企画は非営利のものとして、出演料も入場料も発生しないこととし、その上で必要経費の工面を考えた。資金源獲得のため、3月18日にオーストラリア政府が拠出する豪日交流基金の助成に応募した（学術発表と演奏によってグレインジャーのオーストラリア人としてのアイデンティティを探求する企画を提案した）。締め切り直前に東日本大震災が起これ、締め切りも審査も遅れたが、最終的に、7月19日付けで助成の決定通知を受け、企画が実現する運びとなった<sup>4)</sup>。

スタッフ・会場については、非営利の企画ならば、本務校の協力を得ることが最善と考え、また、実際、総合文化政策学部に関わるイベントとしてふさわしいものだと判断し、私は教授会で共催を求めた。理由は以下のとおりである――

### (1) 本学部の研究・教育領域と関わる、文化的な研究対象

企画の狙いは、グローバリズムや多文化共生・横断性を先取りした音楽家の仕事と生涯に21世紀の文化創造・保護・運営のヒントを求める点にあり、本学部の研究・教育領域に合致する。

### (2) 「ラボ・アトリエ実習」の成果発表の場になる

本学部でのラボ・アトリエ実習の各種活動組織の成果発表の場になる。いわゆる「音楽ラボ」（川口義晴先生担当）には、プログラムの企画・運営について協力を要請中。「映像翻訳ラボ」（宮澤淳一担当）では、グレインジャーのドキュメンタリー映画『高貴なる蛮人』と伝記映画『パッション』の字幕製作を担当する予定。[……] 映像関連の「ラボ」にも協力を求める可能性もあり。それぞれの実践に教育的効果が見込まれる。

### (3) 青山学院における企画の有意義な位置づけ、学内外へのアピール度も高い

吹奏楽や合唱など、学内団体や高等部のクラブ等にも参加を要請する予定で、学院全体に波及する啓発的な企画となりうる。テーマと企画の独自性からメディア等、外部の注目も見込まれる<sup>5)</sup>。

この説明に含まれる案のすべてが実現したわけではないが（例えば、映画は『高貴なる蛮人』のみとなり、高等部や大学の吹奏楽団等、青山学院内部の演奏団体の共演

4) 応募にあたっては、長木誠司教授（東京大学大学院総合文化研究科）と、バーリー・ピーター・オウルド氏（グレインジャー協会秘書）の推薦状を賜った。この場を借りて両氏に御礼申し上げる。また豪日交流基金日本事務局長の堀田満代氏、日本音楽学会の磯山雅会長にも感謝したい。

5) 宮澤淳一「国際シンポジウム&コンサート（2011年11月）の共催願い」青山学院大学総合文化政策学部執行部・教員各位宛、2011年3月8日付け。

は時期的な都合でかなわなかった)、3月8日の教授会において共催は認められ、さらに企画が進められた。(なお、その後の9月には、「ラボ・アトリエ実習」の学生たちのコミットメントの参加度の大きさに鑑み、教授会の判断で、この企画は総合文化政策学部が主催、実行委員会が共催に変更された。)

そして、会場としては、利便が良く、規模も十分な青学講堂を確保した<sup>6)</sup>。

### 複数公演への規模の拡大

グレインジャーの企画を具体的に組み始めたのは、豪日交流基金の助成が決まり、資金のめどがたった7月後半以降だが、いくつかの新しい問題が生じ、それを解決していった。そのひとつは、豪日交流基金の助成だけでは経費をカバーできないこと、加えて、規定により同基金の助成金からは謝礼が支出できず、海外からのゲストの講演料をまかなえないことであった。そこで、この決定後に、日本音楽学会の「支部横断企画」にも助成を申請し、映画字幕の焼き付け手数料、プログラム印刷代、講演謝礼2名分を求めたところ、幸い、公演直前に認められた。

もうひとつは、東日本大震災の被災地でも同様のイベントを催すことが基金の助成の条件になった点である。実際、これは申請書に含めてあった提案なので、これには積極的に応えるべく実行委員会はあちこちに問い合わせたが、被災地では、慰問イベントがすでに目白押しであり、他方、被災をまぬがれた会場も少ないとわかる。会場とイベント運営の受け入れ先は容易に見つからなかった。

それでも、思いがけず、オーストラリア研究を専門とする東北文化学園大学総合政策学部の飯笹佐代子准教授が企画を受け止めてくださった。同学部の学部長でアートマネジメントの専門家、志賀野桂一教授のご理解もあり、仙台市内の常盤木学園シェトラウスホールを紹介され、仙台での催しは、同ホールでの映画とP・スウェイツによるレクチャー・コンサートを東北文化学園大学との共催で行なう形に決まった<sup>7)</sup>。また、実行委員会では、被災地以外の地方都市でもイベントの開催を模索したところ、京都日本オーストラリア協会代表の村上さつき氏が共催を引き受けてくださり、柿沼敏江との綿密な準備を経て、京都府京都文化博物館別館ホールが確保された。

以上の結果、「グレインジャー音楽祭2011」は、東京公演 = 11月27日(日)10:30 ~ 18:40 (総合文化政策学部主催・実行委員会共催)、仙台公演 = 11月29日(火)13:30

6) 最近、座席が新しくなり、1階705席、2階451席、3階545席(計1701席)を有するが、今回の催しでは1階席のみを使用した。

7) ホールは常盤木学園高等学校の敷地内にある。同校は音楽科を持ち、在校生を聴衆の主体とする企画となった。音楽科主任の尾形牧子先生のご協力にも感謝したい。

～ 16:00 (実行委員会主催・東北文化学園大学共催)、京都公演 = 12月1日(木)18:00  
 ～ 20:30 (実行委員会主催・京都日本オーストラリア協会共催) ——と、3箇所での  
 実施という、小規模ながらグレインジャーのプレゼンスを日本の広域でアピールする  
 企画となった。

### プログラム編成・出演者の決定

話を東京でのイベントに戻すならば、プログラムの構成と出演者は、7月中旬以  
 降、実行委員の数回にわたる会合の中で固まっていた(日付も11月27日に確定)。  
 最終的に、午前中の映画上映、午後にはピアノ・ソロ、基調講演、国際シンポジウム、  
 ウインド・セッション(吹奏楽)、ピアノ・チームワークとフィナーレという流れを  
 決めた(当日のピアノの調律の時間を確保する関係で、映画は6号館621教室で上映  
 することとした)。

ドキュメンタリー映画『高貴なる野人』の字幕作成は、原案どおり、私の担当する  
 「ラボ・アトリエ実習」の学生たち(「映像翻訳ラボ」)の課題とした。聞き取りに基  
 づくスクリプトの作成、「ハコ切り」、翻訳、と、彼らはすべてを担った(2011年度  
 に学生たちが字幕を手がけた3つ目の作品となった)<sup>8)</sup>。

ピアノ・ソロ(実演とトークによる有名曲の紹介<sup>9)</sup>)と基調講演はメインゲストの  
 P・スウェイツに依頼。国際シンポジウムは「グレインジャーのオーストラリアン・  
 スピリットとグローバル・マインド」と題し、柿沼敏江と私が登壇するほか、グレ  
 インジャー博物館学芸員アストリッド・ブリット・クラウトシュナイダーを招聘する  
 ことに決めたが、嬉しいことに、開催の約1ヶ月前に、情報を聞きつけた音楽学者チャ  
 ロン・L・ラグズデイル教授(アーカンソー大学)がシンポジウムへの自費による参  
 加を申し出てきたので、実行委員会はこれを受け入れた(おかげで国際シンポジウム  
 の顔ぶれが充実し、私は司会にまわった)。

8) *The Noble Savage: Percy Grainger*, directed by Barrie Gavin, Central Independent Television, UK, 1986. 字幕作成にあたった「映像翻訳ラボ」のメンバーは以下の学生たち計14名である。出口加奈子、石原夏実、内川恵示、小嶋万美子、古内果歩、小山和樹、諏訪珠希、高岸優、福澤加織、船見絵留花、益田茜、山下薫、山下千尋、吉田野乃子。校閲・歌詞翻訳:宮澤淳一。協力: B・P・オウルド、ペドロ・テシェーラ(Pedro Teixeira)、日本映像翻訳アカデミー。

9) 曲目は、《シェパーズ・ヘイ》、前奏曲ト長調、前奏曲ハ長調、《楽しい鐘の音》、《スコットランドのストラススベイとリール》、《美しく新鮮な花》、《アイルランド、デリー州の調べ》、《到着ホームで唄う鼻歌》、《婚礼のララバイ》、《ユトランド民謡メドレー》、《コロニアル・ソング》、《ストランド街のヘンデル》、《カントリー・ガーデンズ》(アンコール)。



「ウインド・セッション」は、大澤健一が指導をするくにたち WINDS (正式名は国立音楽大学ウインドアンサンブル研究会) と特別編成の合唱団 (くにたち WINDS コーラス) が出演。組曲《リンカーンシャーの花束》(司会の宮澤とのトークを交えた全曲解説つき)、《日曜日が来れば私は17歳》、《アイルランド、デリー州の調べ》を演奏した。「ピアノ・チームワーク」は、伊賀あゆみ&山口雅敏のデュオ (2台ピアノ) による、トークを交えたセッションとなった<sup>10)</sup>。「フィナーレ」は吹奏楽を加えての《ガムサッカーズ・マーチ》となった (本誌の「活動記録」も参照)。

### 最終準備と当日を迎えて (反省)

9月から11月にかけて、実行委員会では、海外ゲストの受け入れ準備 (ホテルや特急券の予約)、ポスターやフライヤーの作成 (デザインは高柳一郎事務所) と広報活動、同時通訳の手配 (日本コンベンションサービス株式会社に依頼)、レンタル楽器の確保 (ピアノ2台をヤマハ銀座店に依頼)、各種機材の調達 (学内外各所にて)、出展のアレンジ (アカデミアと東京エムプラスに依頼) を進めた。あとは当日の運営で、当日の約1週間前より「映像翻訳ラボ」に加え、「川口義晴・音楽ラボ」と「大島正嗣・メディアテーク・ラボ」の学生たちを招集し、会場案内・管理、舞台監督、照明、PA、撮影、録音、譜めくり、弁当の調達等、多くの仕事を担ってもらった (川口先生と大島先生の的確な御指導、および、学部4年の葛西 翔君のイニシアティブに助けられた)。しかし、ここは反省点だが、学生の協力をもっと早めに求め、彼らの主体性をさらに尊重し、準備の部分をもっと多く担ってもらうべきであった。実行委員会本部が仕事をかかえすぎたため、滞る作業も多く、広報活動は十分とは言えなかったし (facebook に広告を出したのは新しい試みとして有意義であったが、各種メディアへの告知が不十分で、読売新聞と日本経済新聞にしか取り上げられなかった)、プログラムの作成・印刷に到っては当日の朝ぎりぎりの完成であった。

当日は好天に恵まれた。午前中の映画から数十名の観客が集い、午後も増減はあったものの、同様の客数を維持し続けた。大人数の動員には到らなかったが、熱心なファンも詰めかけ、グレインジャー初体験の聴衆にもおおむね好評であった。映画や演奏の再現はできないが、以下の再録原稿によって当日の充実ぶりの一端をつかんでいただければ幸いである。

最後に、この場を借りて、関係者と来場者各位に御礼申し上げます。

10) 曲目は《子供の行進曲》、《カントリー・ガーデンズ》(各種ヴァージョン)、《ウォーキング・チューン》、《緑の草原で楽しく踊ろう》、《シェパード・ヘイ》、《楽しい鐘の音》、《ワルソー・コンチェルト》(アディンセル原曲)、《ポーギーとベス幻想曲》(ガーシュイン原曲)、《ザンジバルの舟歌》(スウェイツと1台6手)。